

---

# あの夏のわたしたち

石田多紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの夏のわたしたち

### 【Nコード】

N6582C

### 【作者名】

石田多紀

### 【あらすじ】

夏休みが終わるころ、伯父がアンドロイドを作り出した。従兄のために。それは本当に、人間そっくりだった。先に載せた「天使なんかじゃない」の、対になります。よろしかったら、読んでみてください。

今朝の新聞に、実用可能なアンドロイドの記事が載っていた。そのアンドロイドは、成人男子とほぼ同じ体格をしていて、歩いたり座ったりをこなし、挨拶や物の色を識別して答える程度の、簡単な会話さえ可能だという。

これは画期的なことだと、新聞は告げていた、アンドロイド、というか人工知能の研究にとって、長足の進歩だと。

私は、五年前に我が家にいたアンドロイドのことを思い出した。天才とも奇才とも呼ばれていた伯父が作り出した、ユーインという名のアンドロイドのことを。

そして、従兄の隆人のことを。

私は小学校の頃から、伯父の家で育った。両親を交通事故で亡くしたのである。隆人と私も、その車に乗り合わせていた。私たちは運良く助かったが、隆人には障害が残った。下半身と左手に麻痺が残り、彼は車椅子の人となった。

伯母はもともと過保護な人であったというが、この事故から後、盲愛的になった。加害者の娘、しかもかすり傷で済んだ私を決してこころよくは思わず、虐待こそしなかったが、まったく無視した。伯母の生活は隆人にいを中心に戻り、隆にいの具合の悪いときには、一緒に寝込んでしまうほどであった。

隆にいと私は、仲がよかった。

四つ違いのこの従兄に、一人っ子の私はよく懐き、どこに行くにも後ろをついて回ったのを、覚えている。あの日、強引にドライブに誘ったのも、たぶん私であり、だからこそ伯母は、私を抹殺したかったのかもしれない。

隆にいが、私のことをどう思っていたのか、結局のところ、わからない。

あの事故の後、彼とはめったに話しをする機会がなかったのだ。それは伯母が、私をそばに寄せつけなかったためもある。だが、私だけがただ一人、無傷で助かったことに負い目があったのは事実だ。

伯父は、私を可愛がってくれた。

あの広い家の中で、それはずいぶんと救われた。

伯父は、人工知能の研究者だった。大脳生理学者の土台を生かした研究は、その道ではかなりの物だったという。ある企業の援助で、自分の研究所を持っていたほどである。

ここに遊びに行くのが、私は好きだった。

たくさん並んだPcやら模型やら、迷路図のような大脳地図やらコードのたくさんついた脳波計やら……。伯父は伯父で、私のデータを取ってもいたようだったが、いやではなかった。そのかわりに好きに見せてくれた一つずつのドアの向こうに、そんな物が隠れていて、遊園地のからくり屋敷のような魅力を感じていたのだ。

私の母より十以上も年上のこの主は、小さい私と息子を抱いて、よくこう言った。

「いいかい、そのうちに、アンドロイドが現れる。いいや、アンドロイドという名前ではないかもしれないがな。それは、危険なことや力のいる仕事を援助するようになる。あるいはもつと身近に、生活そのものを援助するかもしれない。だがな、これだけはいえるぞ。そいつらは、どんどん感情を持つていく。人と交わることで、人に近づいていく。これだけは、間違えないぞ。なにしろわたしが、作っているんだからな」

夏だった。

隆にいが、しばしば呼吸困難を起こすようになり、ほとんど寝たきりの生活となった。湾曲した脊椎が、呼吸中枢を圧迫するようになってきたのだ。

伯母は半狂乱となり、隆にいに付ききりとなった。ヒステリー症

状で失神することもあった。無視どころではない、私ははつきりと攻撃対象となった。

伯父だけが頼りだったが、この時期、ほとんど家には帰らなかった。

隆にいよりも、たぶん伯母の状態を心配した主治医が、転地療養をすすめた。町中のこの家ではなく、静かな湖畔の別荘で暮らすことを、推したのだ。

隆にいと伯母は、すぐに別荘に行き、戻ってこなくなった。伯父は五日間を研究所で過ごし、週末を別荘で送るようになった。

私は、別荘には、行かなかった。

苦しむ隆にいを見ることも、伯母の目に射すくめられることも、どちらも怖かったのである。

あの夏、来週には学校が夏休みになるという最後の木曜日、伯父が家に戻ってきた。

まっすぐに私の部屋に來ると、緊張した面もちで、言った。

「支度をしなさい、真由子。隆人が、危篤だ」

別荘は、家から車で二時間、湖を見下ろす高台にある。ぐるりを林に囲まれた、こんな気分でなければ、ずいぶんと快適なところだっただろう。

車から下りた私と伯父は、とる物もとりあえず、中へ入った。

一階は、しんとしていた。

「伯父さん……」

私は不安になった。

もしかしてもう、間に合わなかったのではないかと、そう思った。「二階だよ」

伯父は力強くそういって、私の手を握ってくれた。その手はじつとりと湿っていて、彼も不安であることがわかった。

私たちは広い玄関ホール奥にある階段に向かった。家政婦の牧瀬さんが、左手の方から出てきた。

「牧瀬さん、隆人は」

「先ほど高木先生が見えて、もう大丈夫だろうと。それより、奥様が」

「郁江が？」

伯父はさらに緊張して、階段を駆けるように上り始めた。

その時だ。

二階から、水差しを片手で持った少年が、下りてきたのだ。

年の頃は私と同じくらい。

肩までの髪を無造作にゆらし、白いＴシャツとジーンズをはいていた。

いや、私の目を引いたのは、そんなことではない。

彼は、どこがおかしかったのだ。

私たちを見下ろしながら、その視線は、どこにも合っていないような、そんな雰囲気があった。

「ユーイン」

伯父が呼びかけた。

少年はこくりと頷き、そのまま階段を下りてきた。

「ユーイン、郁江はどうした」

「奥様はお倒れになり、今は高木先生が見ていらっやいます。」

「隆人は」

「隆人様は意識を取り戻され、今は眠っていらっやいます。隆人様については、もう少し寝かせておくようにと言うのが、高木先生のご指示です」

声自体は、どうということもなかった。しかしその声音というか、アクセントというかが、おかしかった。どこにも感情のこもっていない、平坦な、声。

私は彼から目が離せなかった。

伯父は、そうか、というと、ふうつとため息をもらした。それから私に向いて、彼を指さした。

「真由子、紹介するよ、彼はユーイン」

「…ゆーいん？」

「そうだ。隆人と郁江の世話をしている」

いつそんな人を雇ったのだろう。今までは牧瀬さんと和子さんしかいなかったのに。それにどうして、こんな男の子を雇ったのだろう。私とそう変わらない年のはずだ、それは子供ではないか。

怪訝そうな顔をしていると、伯父が、すぐ耳元で声を潜めた。

「アンドロイドだ、真由子」

「！？」

「声を出すな、ほかの者は知らない」

伯父はすばやくそう言ったが、もとより声など、出なかった。

少年はゆっくりと階段を下りてくると、私の横に立ち、正確に三十度、頭を下げた。

「どうぞよろしく、真由子様」

私は驚き、ただ彼を見つめることしかできなかった。すると彼は、つと視線をはずし、そのまま階段を下りていつてしまった。

「驚いたか、真由子。だがこの話は後だ。とにかく郁江と、隆人に会わなければ」

伯父の言葉に、何とか自失状態から抜けた。

そうだ。とにかく隆にいと、それから伯母さんだ。すべてはそれからだ。

隆にいの部屋は二階の左端にあった。まず伯母にあって来ると伯父は言い、私は一人で部屋の中に入り、ベッドのそばに、おそるおそる立った。

彼は楽そうな呼吸をして、静かに眠っていた。

私が想像していたよりずっとずっと穏やかなその様子に、ほっとした。

「……真由子」

私が顔をのぞき込むのとほぼ同時に、隆にいは目を開いた。穏やかな声だった。

私が聞いたことのない、とても穏やかな声だった。

「よかった。心配したよ、隆にい」

「心配、かけたんだね。ごめん、もう、大丈夫だよ」

隆には、ゆつくりとそう言った。

私は驚き、そしてとても嬉しかった。

あの事故以来、こんなに優しい隆には初めてだったのだ。話し  
をすることさえ、久しぶりだ。いつもは伯母が、そばに寄せてくれ  
なかったから。

「どうしたの。僕を心配してきてくれたのだろ」

そして彼は、微笑んでさえ、くれたのだ。

転地療養を勧めてくれた高木先生に、思いきり感謝したい気持ち  
だった。この高原での穏やかな生活が、隆にいをこんなに穏やかに  
してくれたのだと、素直に信じたのだ。

「隆にい……」

「きてくれて、嬉しいよ、真由子。ここは静かで、いい所なんだけ  
れど、母さんと二人きりだろ、退屈で……」

「いいの隆にい、私、ここにいてもいいの？」

「おかしい事を、言うんだなあ。もちろん、いいに決まっているさ」  
隆にはベッドに横になったまま、もう一度笑った。

その笑顔があまりにも優しくかったので、私は彼に、抱きつくこ  
ろだった。

そのゆがんだ身体を、心から愛おしく思ったのだ。

「隆人様。」

その時だった。

いきなり背後から声がして、私は驚いて彼から離れた。振り返る  
と、そこにさっきの少年が立っていた。

いつ入ってきたのか、全然気がつかなかった。いつからそこにい  
たのか、まったく気配を感じなかったのだ。

「ユーインか」

しかし隆には、別に驚いた様子もなく、少年の名を呼んだ。



そうだ、ユーイン。

そして伯父は、この少年をアンドロイドだと言ったのだ……。

「何だ」

「お薬の時間です、隆人様。真由子様は、一階の書斎で、旦那様がお呼びでした。」

「そうか」

隆にいが返事をする、少年は　あるいはアンドロイドは　まっすぐ私たちの方へ歩いてきた。両手で水差しと薬包の載ったトレーを持っていた。

私は、その動きを、じっと見つめていた。

目が、離れなかったのだ。

それはなめらかに、何一つ違和感を感じさせずに、歩いた。

バランスのよい姿勢をし、どこにも機械らしさを感じなかった。

整った顔立ちをしていたが、それだって、決して作り物めいてはいなかった。

上手に私を避けて、それは隆にいのそばに立った。水差しからコップに水を注ぎ、隆にいに渡した。

正確な、しかしどこにも無理を感じさせない動作だ。

「真由子」

私が茫然としていると、コップを受け取った隆にいが声をかけた。

「真由子、書斎は、一階の右の端だよ」

「あ、ああ。ありがとう、隆にい……」

視線を戻し、でも何にも合わせられないままに、私は部屋を出た。混乱したまま、伯父の書斎に向かった。

伯父は、私をからかったのだろうか。

どう見たって、あれは人間であった。

その量感も質感も、動きも声音も、人間の物であろう。

あの圧倒されるような無表情がなければ、私はこんなに迷ったりはしなかった。

「伯父さん！」

ノックもせずに、私は伯父の書斎に飛び込んだ。伯父は書類から目を離すと、手を差し出した。

「おお、真由子。隆人は、どうだった？」

「あ、ええ、とても具合が良さそうだったわ。危篤なんて信じられない。伯母さんは？」「郁江はまだ混乱している。会わない方がいい。わたしたちが着く前は、大変だったようだよ」

伯父にいきなり隆にいのことを聞かれ、何となくユーインのことを切り出しにくくなった。

「その……、伯父さん？」

伯父もまた、何か言いたいことを言い出せないようで、書類の上を何となくさまよっている。

「なんだ」

明らかにほっとした様子で、応えた。

「あの、アンド、ロイド、の、事なんだけど」

「おお、そのことか！」

伯父はぱつと顔を輝かせて、とたんに饒舌になった。

「あれはな、最新の樹脂を用いて外見を仕上げてある。だから、皮膚の感じも爪や体毛も、ヒトにそっくりだろう。身体の方はな、さほど苦労しなかったが、顔には苦労した。表情という物が、あんなに難しいとは、思わなかった。あの顔の下に、一体何本のソフトチューブとファイバーが潜んでいると思う？ ヒトの筋原繊維以上だ！ それを持ってしてやつと、あの豊かな表情を生み出せる。」

しかしなんというてもやはり、中枢知能だ！

あれは、幅聴覚はもちろん、立体視だってできる。匂いまでは、さすがに無理だがな。あの身体すべてがセンサーと言っていい。それから得た情報を、統合し出力するための中枢！ わたしの長年の研究の成果のすべてだ。

さすがにあの小さな体の中には収まらなかった。だから本体は…

…」

「じゃあ」

私はろくに聞いていなかった。

それではやはりあれは。

「アンドロイドって、本当だったの」

「……なんだと思ったのだ。隆人は……」

「隆には知っているの？」

「いや、ユーインがアンドロイドだって事をか？ もちろん、知っているさ。私と隆人と、そしておまえただ、真由子」

伯父は立ち上がり、私の横に並んだ。

「真由子。隆人は、そう長くはない」

「え？」

私は伯父を見上げた。

伯父は、決して私の方を見ようとはしなかった。

「もう、あの体重を、隆人の心臓は支えきれない。今は元気だ。だがそのうちベッドから起きあがれなくなり、ろうそくの火が消えていくように、静かに最期を迎えるよ」

「そんな、」

何とも答えようがなかった。

隆にいが、いつかは死んでいくだろう事は、漠然と理解しているつもりだった。彼が、こわれ物の陶器であることは、あの不自然な体つきからも、十分考えられたのだ。

しかし実際にそうと告げられることがあるとは、考えていなかった。

考えられなかったのだ。

「その日は、必ず来る。今の調子は、ろうそくの火の最期の輝きだよ。今のうちに、十分元気な姿を見せてくれなくては、困る」

伯父はそこで私に向き直り、強い目で念を押した。

「そのために、ユーインは、絶対に必要だ」

伯父の言いたかったことは、これだった。私に、ユーインを認知させたかったのだ。

「わかるな、真由子」

「……わかる……」

ほかになんと答えればよいのか。

ユーインと接するにあたって、伯父は私に二つを約束させた。いきなり身体に触らないことと、髪にさわらないことだった。

「あの髪は、いわばリモコンの受信部だ。触ると動きに乱れが出るかもしれない」

要するに、隆にいと変わらないということだ。

隆にいても、いきなり身体に触ったりおどかしたりしたら、心臓に障るというので禁止されていたし、髪というか、頭に触るのは、隆に自身嫌がったのだ。

ユーインを、すぐに受け入れたりはできなかったが、その存在を何となく認めるようにはなっていた。認めたくない気持ちは強かったが、隆にいの世話にユーインが適当だというのは、確かだった。時間に正確で、沈着冷静で、力が強い。

情にほだされず、正確で、緻密。

隆にいを軽々と抱き上げる力は、私にも和子さんにもなかったし、隆にいの小さなわがままを情に流されずにさばくのは、やはり私たちには荷が重かった。

伯母さんはいまだに寝込んだままだった。その間、私は日中のほとんども、隆にいの側で過ごした。

その側に、ぴったりと、ユーインが控えていた。

私のはしゃぎすぎたり、隆にいが興奮してきたりすると、決まって冷たい声で、「お控えください、真由子様。」と、言った。そのたびに小さな不快感を覚えたが、逆らったりはしなかった。その忠言がいつも正しいことは、半日としないうちにわかったし、ユーインは決して、むやみになんでもを禁止したわけではなかったからだ。三日間は、楽しいうちに過ぎた。ユーインが、にやりとすることもあった。伯父の言う豊かな表情というのは、この程度なのかと、多少情けない気もしたけれど、そのにやりには、いくらか暖かみが

あるような気さえ、だんだんしてきたのだ。

そして四日目、伯母が起きあがった。

その日も私は、隆にいの部屋で時間を過ごしていた。もちろんユーンが側に控えていたけれど、私はもう、彼のことをほとんど気にしないようになっていた。

そう、彼、と呼べるほどに。

私たちは他愛のない話しをして、くすくすと笑いあった。学校での話しが主だった。以前なら、隆にいの気に障るのではと、その手の話しはさけてきたが、このごろでは隆にいの方から、それを望んだのだ。

「奥様、まだ起きあがっては」

和子さんの興奮した声が廊下の方から聞こえてきた。

伯母さんだ。

伯母が、ここへ来ようとしているのだ。

私は緊張して、思わず立ち上がった。

私がここにこうしていることを知ったら、伯母は一体、なんと思うだろう。なんにしろ、よくは思わないに違いない。私を息子に近づけまいと、あんなに努力してきた人だ。何を言われるかわかった物ではない。ここに私がいることは、伯母にとってはひどく腹立たしいことでは、ないはずだ。

「ど、どうしよう」

私はおろおろとして、すぐにでも部屋を出ようと思った。しかし伯母の声は、もうすぐそこに聞こえており、とても会わずに済ませずには、いられそうにない。

「真由子」

その時、隆にいが言った。

「な、なに？」

「君は、そこにいるといいよ。どこにも、帰る必要は、ないよ」  
「でも」

「いや、真由子は、帰っちゃだめだ。そうだな、ユーン」

「はい。隆人様。」

私はびっくりした。

隆にいが、伯母に逆らうようなことを言ったのはもちろん、その途端にユーインが立ち上がり、ドアを開け始めたからだ。

「ユーイン、私まだ、心の準備が」

「隆人！」

その途端に、伯母が、部屋に入ってきた。ユーインを間に、私と伯母はまともに向き合ってしまったのだ。

伯母は、確かに常軌を逸していた。

部屋着のままだったのはともかく、その目が、常態ではないことを告げていた。

確かに以前から、伯母はまともとはいえなかった。私が隆にいに近づいただけで、ヒステリーを起こし、ひどいときには失神もした。しかし、ちゃんと私を認識はしていたのだ。

「伯母さん……？」

確かに私と向かい合っている。

しかし彼女の目は、決して私を見てはいなかった。焦点の合わない見開かれた目は、私をすり抜けて、隆にいを見つめていた。

「隆人！」

伯母は私に、どんとぶつかった。ユーインが抱きとめてくれた。

私は呆然と、伯母を見つめた。

彼女には、私は見えないのだ。

彼女の目は、すでに私を透かし、隆にいだけを捉えたのだ。

「ああ、隆人、ほらご覧なさい、やっぱりあなたは元気じゃないの！」

たぶん私は、震えていたと思う。

伯母は隆にいをしっかりと抱きしめ、何度も何度も頬ずりを繰り返した。

その動作はぎこちなく、しかし執拗に続き、私はショックで立ってられないほどだった。

ユーインが、柔らかく抱きとめていてくれた。  
柔らかく、優しくかった。

「何かお飲みになりますか、真由子様。」

「ううん、いらない、ありがとう」

私を支えて、ユーインは部屋まで送ってくれた。  
まともには、歩けなかった。

「ユーイン、伯母さんは、いつからあなの？」

「ああ、とは、どのような状態でしょうか。」

「いつからあんな風に、隆にいしか見えていないのかって事よ」  
ユーインに導かれてベッドに座りながら、聞いた。

「奥様が常態ではないと判断されたのは、隆人様が危篤に陥ってからです。隆人様が意識不明になられるとともに、奥様もお倒れになり、以来常軌を逸しています。一時は旦那様も認識できませんでした。一度目の混濁常態から脱されました下り、旦那様を認識されました。」

「……そう」

つまりあの人は、隆にいしか見えていなかったのだ。私を憎んでいたはずなのに、実はそれさえ、どうでもよかったのだ。

私は別に、伯母を慕ってはいなかった。

だがこの事実が、かなりショックだった。

子供だったのだ。

子供だから、憎んでてもいいから、気にかけていてほしかったのだ。

泣いていた。

なぜ涙が出るのか、その時には理解できない涙だった。

ひとしきり泣いた後で、まだそこにユーインのいることに、気がついた。

「大丈夫、私は大丈夫よ、ユーイン」

ユーインは黙ったまま、くるりと後ろを向いた。

「ユーイン」

自然と唇をついた。私は彼を呼び止めていた。

「ありがとう」

「わたしは人形です。真由子様がわたしに礼を言われる必要は、いっさいありません。」

なぜか、苦しそうに聞こえた。

彼はそう言うと、静かに部屋を出ていった。

私は、彼の消えたドアを、しばらく見つめていた。

この時から私は、真剣にユーインを見つめ始めた。これまでは、隆にいの世話をする物としか捉えていなかった彼を、それ自体として見つめだしたのだ。

隆にいいは伯母がつきつきりとなったが、就寝前にだけ、会うことができた。

隆にいが眠ったふりをする。すると伯母は、安心して自室に戻る。そうしてから、ユーインがこっそりと、私を呼びに来るようになっていた。

最初は病気に障るのではと、早々に切り上げていたが、二三日もするうちに、すっかり慣れてしまった。何より、隆にいが笑ってくれるのが、一番嬉しかった。

こんな時ユーインは、すぐ側に、静かに控えていた。隆にいが興奮してくると、「隆人様。」と、冷静な声をかけるのだ。

その声にも表情にも、色はなかった。

しかし私は、かえってその無表情に、違和感を感じるようになっていた。

あの、苦しそうな声は、なんだったのか。

私の思いこみ、勘違いだったのか。

いいや、そうではない。

あのときの彼こそ、伯父の言っていた、だんだんに感情を得ていくということだったと思う。では、ここに今いる彼は、いったい何



なのだろう。一度得た感情を、彼はなくしてしまうのだろうか。そんな物なのだろうか。

そのうちに、自然と一つのことを考えるようになった。

ユーン。

伯父が造り出した、世界初のアンドロイド。

彼は本当に、人間ではないのか？

夏休みを半分も過ぎたころ、私は久しぶりに、伯母と顔を合わせるようになった。朝や夕の食卓に、出てくるようになったのだ。

「おはよう、真由子ちゃん」

しかもその日は、驚いたことに、私に挨拶までしてくれたのだ。

それも、和やかな声で、である。

「お、おはようございます」

私は吃驚して、どもってしまった。

「あの人はねえ、今日も帰らないんですってよ。いくら研究といつても、週の半分以上もいないなんて、ひどいとは思わない？」

「え、は、はい、ええ」

あの人というのが伯父のことだと、やっと気がつく。

「隆人も、最近ではずいぶん体調がいいの。真由子ちゃんも、部屋にきてやって頂戴ね」

これは、ずいぶんの変化だ。

あの、伯母が！

私を嫌い、無視してきた伯母が。

私はしばらく、伯母の顔を見つめてしまった。それこそ、伯父がアンドロイドでも造り出したかと思ったのだ。

「なあに、わたしの顔に、何かついてる？」

「喜んで、お部屋に行かせてもらいます！」

私は椅子から立ち上がり、そう叫んだ。

声がひっくり返っていた。それくらい、嬉しかった。

「ユーイン！」

さっそく隆にいの部屋に向かった私は、ドアの前に立っていたユーインを見つけ、その身体に抱きついた。

「ユーイン、伯母さんがね、隆にいの側に行ってもいいって、言ってくれたの！」

「そうですか。」

彼は持っていた水差しを身体の横にそらし、器用に身をひいた。

「隆にい、ずっと調子良さそうなものね。それもあなたのおかげね。まったく伯父さんは、いいものを造ったわ。隆にいの調子いいのが、その証拠よ」

今度は、ユーインの肩をつかんだ。

彼は水差しを持った手を手品のように操って、再び私から逃れた。「そうですか。」

その声はとても平坦で、私ははしゃいだ気分、水をかけられたような気がした。

「何よ、ずいぶん冷たいわよ、その言い方は」

鮮やかに身をかわされた悔しさも手伝って、私は言いつのつた。

「伯父さんはあなたを感情豊かに造ったと威張っていたけれど、それは失敗よね。あなた、ちっとも表情変わらないし。さわり心地はいいけれど。思ったより柔らかいし。」

ほらあ、こういう時はにっこり笑って、よかったですね、っていうものよ」

私は、ユーインの顔を下から覗くように、見つめた。  
はっとした。

彼の目は閉じられ、それからゆっくりと開かれた。

「わたしは、隆人様の人形です。柔らかくても当然です。感情という言葉は、わたしには理解できません。」

しかし私は、見逃さなかった。

無表情を装ったその唇の端が、かすかに震えていた。  
目に、怯えの色があった。

私が伯母の前で見ていたのと、同じ色の。

「ユーイン」

考えるより先に、言葉がでていた。

ついと向けた彼の背中に向かつて、私は言っていた。

「あなた、本当に、アンドロイドなの……？」

それからしばらく、ユーインを見なかった。

伯父は定期点検だといった。

私たちは、たいていの時間を隆にいの部屋で過ごした。

私と伯父と、伯母とである。

隆にいはあくまで機嫌がよく、だから伯母は落ち着きを取り戻し、私たちは、本当の親子のようだった。

家では考えられないことだった。この日々がいつまでも続かないかと、本気で願った。無理だということは、わかっていた。

私たちは、不安定なガラス細工だ。

何か一つでもバランスが崩れれば、こなこなに砕け散ってしまうのだ。

不安で不安で、だから私は笑っていた。

この不安定な関係の中で、いつまでも笑っていたかった。

来週から学校が始まる、水曜のことだった。

その日もまた、私たちは隆にいの横で、ベッドを囲んで一日を過ごした。

今日の隆にいは、いつもよりはしゃいで見えた。苦しそうな呼吸で笑い、あえぎながらも、機嫌がよかった。最近ではすっかり常軌に戻った様子の伯母が、彼の背を優しくさすりながら、微笑んでいた。

「ああ、楽しかったよ、ありがとう」

隆にいはにこにこそう言い、少し疲れたと、いつもより早く寝入った。

夕食をとった後、私は自室で宿題と取り組んだ。そしてそろそろ寝ようかという時に、ドアがノックされた。

「誰？」

ほんの少しの不安。

「失礼いたします。」

「……ユーイン」

それは久しぶりに見るユーインだった。

相変わらずの、仮面のような無表情だった。

ユーインは、正確に一礼してから、言った。

「お支度を、真由子様。二分前に、隆人様が、息を引き取られました。」

それからしばらくの事は、よく覚えていない。

確か隆にいの部屋に駆けつけたのだと思うのだが、何をしたのか、隆にいがどんな姿をしていたのか、まるで思い出せないのだ。

覚える必要がなかったとも、いえる。

私たちは、いずれこの日が来ることを、あらかじめ知っていた。

だからこそ、残りの日々を楽しく過ごそうと懸命だった。

葬儀の日、伯母はしっかりとしていた。

人々の弔問を、上の空とはいえ、ちゃんと受けていた。伯父が、

伯母のそばを片時も離れなかった。しかし、私が初めて別荘に着いた日のように、取り乱してはいなかった。

ユーインがいて、よかった。

虚しい隆にいの遺影を見ながら、私は思った。

彼がいたから、隆にいはあんなに元気になれたのだろう。隆にいの笑顔をみられたことで、これからもたぶん生きていける私たちは、彼に許しを乞うための、自己満足でしかない猶予時間を与えられたのだ。

ユーインに会いたい。

私はそれだけを考えていた。

会って、隆にいのことを、思いきり話し合いたかった。  
しかし彼は、どこにもいなかった。  
家の中にも葬儀の会場にも、彼の姿はなかった。

「ユーインは、解体するよ」

やっと落ち着いたところに、私は伯父に、ユーインの行方を聞いた。  
すると伯父は、思っても見なかったことを言ったのだ。

「解体って……」

「隆人は死んだよ、真由子。もう、ユーインの役目は終わったさ」  
書斎の椅子に深々とかけた伯父は、ずいぶんと年をとって見えた。  
「でも伯父さん、解体って、どうするの。」

だって、ユーインは……」

一度は躊躇した。

だが、言った。

疲れたような伯父に、私は言った。

「だってユーインは、人間でしょう？」

伯父の肩が、びくりと震えた。

私の視線を力無く受け止めた。

私は、ほおっと、息を押し出した。

そう。

ユーインは、人間だ。

だって、アンドロイドのはずがないのだ。

「わかった、真由子。」

ついてきなさい、ユーインに、会わせてやろう」

考えてみれば、簡単なことだったのだ。

ユーインがアンドロイドだというのは、伯父とユーイン自身だけが  
言っていることであって、誰もその証拠を見たことはない。

反対に、彼が普通の人だと考えればごく自然なことが、いろいろ  
あった。

伯父の、常識では考えられない能力が強い煙幕となって、そんな途方もないことを信じさせていたのだ。

伯父は、研究所に向かっていた。

車の中で、私たちは無言だった。

伯父に言いたいこと、聞きたいことはたくさんあったが、今はその時ではないと、思った。すっかり面やつれした伯父は、いたわるべき老人と、私に感じさせたのだ。

「ユーインは、二階の仮眠室にいるよ」

私と視線を合わせず、伯父が言った。

「伯父さんは？」

「後で行くよ、真由子。いろいろと……。そう、いろいろと、片づけねばならないことがあつてな」

私は頷き、一人で仮眠室に向かった。

仮眠室は、二階の奥にある。家に帰ってこないとき、伯父はたいていここで過ごし、研究について考えるのだ。私も、ここに泊まり込んだことがある。伯母との関係に、まだ悩んでいたころのことだ。

「ユーイン」

ドアを静かに開けて、中に入った。

ユーインは、そこにいた。

はじめ驚いたように立ち上がったけれど、私と視線が合うと、静かに笑った。

「……あなたがここに来たということは、わたしはもう、お役御免ということですか？ 真由子様」

「そうよ、ユーイン。もう、いいのよ」

私も、静かに微笑みを返した。

微笑みながら、泣いていた。

ユーインは浅くベッドに腰掛け、私にも座るよう促した。

「あなたは勘がいいから、すぐに気づいてしまうかもしれないと、

博士はおっしゃったのですが。

いつ頃、気がつかれたのですか」

「あの日の、一週間くらい前よ。私、言ったわよね。本当にアンドロイドなのかって」

「ああ、やはりそうでしたか」

ユーインのすすめに、手近の椅子に腰を下ろした。私たちは、ぼんやりと視線を混ぜ合わせていた。直接は、あわせられなかった。そしてまた、逸らすこともできなかった。

でも本当は、もっと前に気づいてよかったのだ。あるいは、最初に彼にあったときに、すでに解っているべきだったのだ。

伯父は言っていた、いつかは、アンドロイドがでてくるだろうと。でもそれは、いつかの話で、昨日今日の話しではなかったではないか。いつも何でも、伯父は話してくれていた。アンドロイドが出来上がったのならば、もっと色々なことを、話してくれてよかったのだ。

「あの後わたしは、あなたに会うのが怖かった。わたしがアンドロイドではないと解ってしまったら、わたしの存在価値はなくなってしまう。そうしたらもう、あそこにいる理由は、なくなってしまう」  
「どうして？ あなたが隆にいいにとって、ううん、私たちにとっても大切な存在だったことは、確かなのよ。いらなくなる事なんてなかったと思うわ」

いいながら、でも妙なことだと思った。

どうして伯父は、わざわざアンドロイドだなんて、言ったのだろう。別に彼がアンドロイドである必要は、なかったのではないか？  
「いいえ、いられなくなっただでしょう。あなたは、勘がいいのだから」

ふと視線をあわせ、彼は微笑んで見せた。

「伯父さんはどうして、あなたをアンドロイドだなんて言ったのかしらね。別に、そうである必要はなかったはずよね」

いいや、それどころではない。

アンドロイドであつては、困るのではないか？

もしも隆にいが、こんな時期に亡くならなければ。

もしもあと一年も二年も生きていたなら。

彼は、成長するだろう。

アンドロイドが、成長することになる。

そうしたらどうしたのか……。

「ちよつと、ちよつと待つて。

まさか……」

もしも、隆にいがこんな時期に。

その時期が。

「まさか、まさか隆にいは……」

わたしは、目が回るのを感じた。

自分の立っているところが一体どこなのか。位置しているのは果たして地面なのか。

わからなくなっていた。

隆にいが。

ユーインではないのなら、隆にいが！

「ほら、やっぱりあなたは、勘がいい」

泣きそうな笑顔で、ユーインが言う。

いいや、泣きそうだったのは、わたしだ。

「隆にいは、じゃあ……」

「そうだよ真由子。隆人が、アンドロイドだったのだ」

いつか戸口に、伯父が立っていた。

「あるいはもつと早くに、気がつくかと思っていたのだがな。案外、もつたな」

伯父は部屋の中にはいると、いかにも大儀そうに、ユーインの隣に腰を下ろした。

ますます、歳をとっていた。

「さて、どこから話そうかな。やはり、隆人の事かな」



「隆にいは、いつ死んだの」

やっと、それだけを口に出した。

「おまえが別荘に行ったときには、もう死んでいた。隆人は最後の発作に、耐えられなかった」

危篤だといわれた。

では、あのときにはもう……。

「だがそれよりも耐えられなかったのは郁江だ。そしてわたしは、それに耐えられなかった。これ以上、隆人のほかに、わたしは郁江をも失うのか？それは嫌だ。それだけは、避けたかった」

伯母は、精神的に脆い人だった。

私は、別荘で最初に見た伯母の様子を思い出していた。

「アンドロイドの研究は、もう一步の所まで来ていた。出力としての身体は、充分に実用に耐えうるだろう。しかし、情報を統合する知能の方は、まだまだ大きすぎる。到底、ヒトの身体の中には収まらなかった。それで、思い切って頭脳は外側において、身体は端末に徹することにした。隆人の部屋の隣には、大きな人工知能があったのだよ」

ユーインが立ち上がり、窓にもたれた。

雨が降り出していた。

ああ、そう言えば私は、隆にいがあの部屋から出たところを、見ていない。

そうか。機械だったのだ。

優しかった隆にいは、笑っていた隆にいは、すべて作り物だったのだ。

「いずれは無理がでる。小さな綻びを繕うために、私はユーインに助けをもとめた。私自身が始終そばにいられたなら問題はなかっただろうが、そうはいかない。それに、何かブラフが必要だったのだ。郁江は……、隆人の死を認められない郁江は、簡単に信じるだろうが、お前はそうはいかないだろう。必ず、どこかおかしいと思うはずだ。」

一生だませるとは、もちろん思っていない。郁江が隆人の死を受け入れられれば。隆人との間に、もつとふつうの、温かい思い出ができれば。それまでの間でよいと思った。

研究所で助手のアルバイトに来ていたユーインに、私は助けをもとめたのだよ」

でも伯父さん、どうして私までを、騙さなければならなかったの。私には、打ち明けてくれてもよかった。

伯母さんを守るためだけならば、決して私に、うそをつく必要は、なかったはずだ。

「嘘よ。伯父さん、嘘をついている。伯母さんのためだけじゃないんでしょう？ 私がどこまで騙せるのか、試してみたかったんでしよう……？」

でも、だめよ。私だって、騙されていたかった。優しい隆にいいいつまでもいつまでも、騙されていたかった。

「私だって、モニターには、なりはしないわ」  
泣いた。

伯父は、何も言わない。

その無言の肯定を受けて、私は泣いた。

「でも俺は、楽しかったよ」

その時に、突然、ユーインが言った。

あの優しい表情で、私の顔を覗き込んでいた。

「博士や奥さんや、そしてあんたと過ごした間、俺はすごく、楽しかったよ」

私はさすがのように、ユーインを見つめた。

「あんたを騙していることが苦しかったけれど、俺はずっと、あのままでもよかった。あのままあんたが笑っているのを、見ていたかったよ」

でも、それではあなたは、認められないままだ。私の中でのあなたは、ずっとアンドロイドのままだ。

「俺はそれでもよかったよ。本当は、あのまま消えていたかったよ。」

だからたぶん隆人さんも、同じだ。きつとあんたの……、  
あなたの笑顔を、見ていたかったはずです、真由子様。」  
私の笑顔を、見ていたかった？ 隆にい。

本当に？ 本当に……？

涙は止まらなかった。でもその涙は、少しだけ違ったものになった。  
ていた。

「ユーイン」

それはたぶん、私の聞きたかった言葉。

私が求めた、唯一のことば。

「……ありがとう……」

その後のユーインは、また元のように伯父の助手に戻っていった。  
伯母は正気を取り戻し、今では笑って、隆にいの話ができる。

伯父は研究を続け、私はその後を継いだ。

新聞の記事は、こう結んでいた。

いつか彼らは、感情を持つという。そう遠くない未来、我々は彼  
らを、どう考えればよいのだろう。

その答えは知っている。

私とユーインだけは、知っている。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6582c/>

---

あの夏のわたしたち

2010年10月8日15時31分発行